
夢幻のソラ

.png

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻のソラ

【Nコード】

N3430J

【作者名】

.png

【あらすじ】

和泉沢大学に通う大学生、佐上瑞樹とその幼馴染、浅木怜美が巻き込まれていく現代の影で起きている事件の数々。異端や人憑と呼ばれる者との戦いを書いた現代伝奇小説です。

序章第一幕

紅い・・・赤い・・・アカイ・・・アカイ・・・アカイ・・・
アカ一色に染まった液体の溜り場、その中心にあるひとつの“モノ”。
奇怪な形をしたその“モノ”。その“モノ”の千切れた欠片・
・
その“モノ”のスベテが深夜の深い闇の中“オレ”の眼には凄く、
酷く奇麗に映っていた・・・

夢幻のソラ 序章第一幕

僕が起きた時に始めて目にしたのは人の顔だった。

「やあ、おはよう。怜美^{れいみ}」

「おはよう、瑞樹^{みずき}」

よく通った鼻筋、雪のように白く肌理細やかな柔らかい肌、円らかな
瞳と長い睫そしてさらさらな黒い長髪。彼女は万人が認める美少女
だろう。それが僕の幼馴染の浅木怜美^{あさきれいみ}だ。

そんな彼女が毎朝起こしに来てくれるのだから僕は大変な幸せ者だ
と思う。

「じゃあ、待ってるから着替えてきてね」

「ああ。分かった」

僕の返答を聞くと彼女は満足したように笑顔をこぼしてリビングの
ほうへ歩いていった。さて、彼女を待たせてしまうのもなんだし早
く着替えなきゃな。

僕の名前は佐上瑞樹。さがみずき今リビングで料理をしてくれているであろう
怜美の幼馴染だ。
今は大学二年。今、住んでいるマンションの近くの和泉沢大学に怜
美とともに通っている。
和泉沢大学は両親の住んでいる絹乃杜市から離れている青山市にあ
るので当然一人暮らしだ。怜美は僕の隣の部屋に住んでいる。

「相変わらず美味しそうだね、怜美のご飯は」

「そうでもないよ」

「いや、これは本当」

そう僕が言っていると彼女は照れくさそうに顔を朱に染めて俯いてしまっ
た。

「それじゃあ、食べようか」

「・・・うん」

彼女はまだ静かにうつむいたままだった。

：

『本日午前二時藍川市でナイフで切りつけられた死体が・・・』
テレビのニュースでアナウンサーが淡々と感情を籠めずに喋ってい

る。こう聞くと怒りの感情も生まれないのだから不思議なものだ。

「ねえ、瑞樹。これって同じ人かな？」

「そうだろうな」

人、と言うのは犯人のことなのだろう。

この手の通り魔的殺人は隣の藍川市で最近多発している。犯人の目的が分からないのが人々の恐怖心を更に煽るのか人々は皆、自然と夜は出歩かないようになっていく。

それでも殺人は続いているその理由は俗に言う不良がそんなことを無視しているのか、はたまたそんなことを知らないのか分からないが出歩いているせいだろう。

———— P L L L L L L L L L

「ん、電話か」

「私が出ようか？」

「いいよ」

自ら出ようとする彼女に断りをいれ受話器を取る。

『もしもし、瑞樹君か？』

「そうですけど黄空さん。こんな朝早くからお元気ですね」

電話の相手は水瀬黄空さん。僕と怜美が入っているサークルの先輩。・いや元先輩で、大学を卒業した今は何かの会社を立ち上げたくしく自らの事務所を持っている。

『うん、私は朝型だからな。』

そんなことよりニュースを見たか？』

彼女には僕の皮肉が効かなかったようだ。

「ええ、通り魔殺人ですね。これで何件目ですか、もう10件くらいでしょうかね？」

『ああ、そのニュースだ。ちなみにこれで11件目だな』

「で、そのニュースがどうしたんですか？」

『おっと、そうだった。そのニュースって何て報道されてたかな？』
報道内容、先程聞いたニュースを思い出すために記憶を弄る。

「たしか・・・ただナイフで切りつけられた死体が見つかったとか

言う話だった気がしますけどそれがどうしました？」

こんな質問はしなくても良いのは分かっている。今までにも黄空さんにこんな質問をされたこともあったから、これからどんなことを聞かされるかも予想は付く。

『^{あなが}強ち間違いではないが、違うといえば違うな。どんな事件が聞くか？』

「いいです。どうせ講義が終わったら黄空さんの事務所に呼ばれるんでしょう。そのときに聞きますよ」

『ははは、流石だね。それじゃあ、講義が終わったら事務所に来てくれるかい？』

「分かりました。それじゃあ」

そう言って通話を切る。彼女の話は講義の終わった後にゆっくり聞くとして、まあ大体は聞かなくても今までの経験から分かっているのだが、今はそんなことよりリビングで一人寂しそうにしている怜美のところへ向かった。

：

「で、また黄空さんのところ？」

「そういうことになるかな。怜美も来るんだろ？」

「今までもそうだったからそうなるんじゃないかな」

彼女の作った朝ごはんの味噌汁を啜りながら先程の電話の話をしていた。

彼女も今まで黄空さんの事務所に来たことがある、というか呼ばれていったことがある。

「ごちそうさま」

「お粗末さまでした」

今日の朝食は和食だった。相変わらず彼女のご飯は美味しい。こん

な美味しいご飯を食べていたのに黄空さんは何であんな電話を掛けてくるのかな、今までの経験から変なことを想像してしまうじゃないか。

「ん、怜美も終わった？」

「うん。後は出かけるだけだね」

「じゃあ、行こっか」

そう言っただけで彼女とともに大学へ出かける。勿論、ある物も忘れずに持っていた。

使い古されたアンティークの黒い電話の受話器を下ろし、考える。

「ふむ、何が言いたいのかもお見通しというわけか。瑞樹君も慣れてきたな」

左手には“ある事件”に関する極秘資料。この資料は本来私のような一般人・・・いや一般ではないけれども簡単に部外者の手に渡るものではないものだ。しかしこれが私の手の中にあるのも彼のお陰なのだろう、感謝はするべきか。

こういうものが手に入るのはいいのだが彼も瑞樹君たちのことを知っているのだろうかこのような面倒ごとを持つてくるのもやめてほしい。

「瑞樹君達が来るのは講義が終わってからか・・・サークルに顔も出さないうちから夕方になるだろうな」

その間は仕事をする他無いのだから手に持った資料を一旦ファイルにしまって仕事をするとするか。締め切りも迫っていることだしな。

序章第一幕（後書き）

知ってる人はお久しぶりです、知らない人は初めまして、作者の
pngです。

この作品は現代伝奇となっておりまして、先日上げました禁忌邂逅
とは別のものとなっています。

それではこれから宜しくお願いいたします。

序章第二幕

『本日午前二時藍川市でナイフで切りつけられた死体が・・・』
朝のニュースでは昨晚起きた通り魔殺人についての報道をしていた。しかし“俺”には関係は無い。そう、“俺”には関係は無い。関係があるのは“オレ”であって“俺”ではない。“俺”は正常だ。そう、まだ大丈夫だ。

夢幻のソラ 序章第二幕

「あ、センパイ。おはようございます」

「あ、樟葉くすはおはよう」

大学構内で挨拶をしてきたのは同じサークルの後輩、樟葉くすは将人。彼はいかにも若者、といった感じで髪は綺麗な金髪に染め上げていて服装も若者その物だ。しかし不思議なもので見た目こそどこぞの不良か、といった印象を受ける服装なのだが礼儀に適った物腰をしている。

「それにしてもセンパイ方は今日も夫婦同伴ですか？」

「いや、夫婦じゃないって」

「あ、そうだったんですか。大学内じゃもう夫婦って言われていますよ」

「そうなのか」

いつの間に僕と怜美は結婚した事になってたんだろうか。まあ、

毎朝僕の部屋で二人で朝食を食べているんだから大学へ来るのも同じになるのが普通になるというものだし、夫婦に見えてしまうものもしょうがないのかもな。

「それじゃあ、お幸せに」

そう言うのと彼は小走りですって行ってしまった。

「で、怜美はどうしたんだ？」

先程から僕の後ろに引っ込んでいた怜美に聞く。

「ううん、何かあの樟葉くんって苦手なの・・・」

「ん、何でだ？」

「なんか、雰囲気って言うのか、そういうのが苦手」

「ふうん・・・。まあいいけどな」

個人の相性なんて人それぞれだから気にするほどでもないだろう。僕はそう思っていた。

...

「で、これが今回の資料だ」

黄空さんが紙の束を差し出してくる。その紙は日差しにせいかうつすらと橙に染まっていた。

「これですか。それにしてもいつも思うんですけど黄空さんってこういう資料どこから手に入れてくるんですか？」

ここは黄空さんの事務所で、この事務所にはアンティークな代物が黄空さんの趣味でたくさんあるのでいつ見ても飽きない。現に怜美はそれをひとつづつ見て周っている。

「あ、怜美くん。それは触らないでくれ」

「はい、ごめんなさい」

彼女たちがそんなやり取りをしている間に資料にざっと目を通す。今回の事件の概要はこうだった。

路地裏で見つかった死体は頸から上が奇麗に転げ落ちており、腕や脚はすべてあらぬ方向に曲げられていたらしい。しかもその死体は腹が切り裂かれていてその中の内臓が全て抉り出されていて、それに伴う出血によってその奇怪なオブジェと化したモノの周り一面を紅く染め上げていた。

勿論、そんな死体のことをテレビで放送するわけにも行かないらしく、テレビでは朝のように若干自制された放送をしていた。

「今回ののは凄い内容ですね・・・」

資料を黄空さんに返しながら一言率直な感想を述べた。

過去にもいくつか見たことはあるがここまで凄惨な資料は見たことが無かった。

「ああ、怜美クンにも見せるか？」

「怜美どうする？」

「え、見ないほうがいいの？」

「心の持ちようだと思っけど今回は流石に見ないほうがいいかもしれないな」

「・・・じゃあ、見る」

そう言って彼女は先輩から資料を受け取り見始めた。

「あと、瑞樹君はこれでも読んで。」

そう言って彼女が出したのは同じような資料。恐らく今回の連続殺人——いや殺戮というべきか——の別の被害者の資料だろう。

その資料の中身は先程のものと殆ど同じで対象が変わっているだけだった。

「殆ど同じですね。っと、怜美大丈夫か？」

「あ、うん。大丈夫」

そっいつも顔はまだ青い。

「怜美クン、もし気持ち悪かったらそこで横になるといい」

「いえ、大丈夫です」

「そうか、君がそう言っのなら大丈夫だろう」

「で、黄空さんは犯人の目星は付いているんですか？」

この手の事件の犯人は今までの経験から“異端”と呼ばれるものと“人憑”と呼ばれるものの二つだ。

異端とはその名の通り異端、つまりヒトとしての異端ということになる。代表的な例は魔術使いや超能力者などだ。大きく括ってしまえば僕や怜美、黄空さんもここに入ってしまうのかもしれないがそこに違いが生まれるのは“協会”の力があるからだろう。

人憑とは人ならざるものの力——霊、妖魔などの力など——を持つているもののことを言う。これの例は獣憑や霊能力者などがここに分類される。

「恐らくは人憑だな。もつと細かく言えば獣憑になる」

「獣憑ですか。では、恐らく憑魂は……」

「“大鬼”だろうな」

僕の考えを告げる前に彼女に言われてしまった。

「でも協会のほうも人を派遣するようだからな。苦勞することも無いかも知れん」

「協会が？」

協会、即ち異端や人憑などを斃す為に創られた一部の異端や人憑の集団である。しかしそこに属する異端は人憑はするように呼ばれることも無く協会の保護——監視とも言われている——の元で過ごす事ができる。

「ああ、このあたりに対妖魔を専門とする人がいるらしい」

「成程。で、今日の夜になりますか？」

今日の夜になる、つまり戦闘だ。

「うむ、今日の夜0時に藍川市の藍川神社で待ち合わせだ」

「はい、わかりました。」

……怜美大丈夫か？」

あれ以来ずっと怜美は顔を青くしてどうみても大丈夫じゃない状況にある。この彼女の様子ならどこぞのラブコメの鈍感主人公でも気付くだろう。

「……大丈夫……」

「ああ、大丈夫じゃないんだな。

じゃあ、黄空さん怜美をよろしくお願いします。」

「ああ、安心して行け。」

「え……私は……」

「怜美は駄目。どうも調子が悪いみたいだから今日は黄空さんと一緒にいる」

「……うん」

どうにか怜美も納得してくれたようだし僕はもう行くか。

「それじゃあ、お願いしますね」

そういつて事務所を出る。空はもう深い藍に染まっていた。

序章第三幕

何か最近サツジンキが何とかで全くとこの店もやってねえ・・・そんなにサツジンキってのが怖ええのかよ。

「なあシンジ・・・なっ!？」

シンジのヤツの周りが紅一色になってやがる・・・

「ど、どういことだ!？」

その時、金色が目の前を走った・・・

「シャアアアア!！」

「!？」

刹那、腹部に鋭い痛み。腹が斬られた、そう思った次の瞬間に俺の意識は途切れた。

夢幻のソラ

序章第三幕

「君が協会から派遣された人かな？」

深夜の神社の境内。目の前にいるのは一人の少年、赤いジャケットを着込み、下はジーンズ、伶俐な顔をしていて髪は方に付くか付かないか位の少年だった。

「ああ、俺は神谷直希だ。かみやなおきよろしく」

「僕は佐上瑞樹。よろしくね」

神谷直希、その名前には聞き覚えがあった。先日、彼が幼馴染と二人で上位妖魔である大鬼を斃した、と言う話は協会でも噂になっている話だった。しかもその大鬼、かなり大きなものだったらしくこのあたり地域の下級妖魔の反応はそれらが恐らく逃げ出したのだろ

う、殆ど無くなった。

「それじゃあ、早速行きますか。君も協会から話は聞いているですよ?」

「ああ、行きましょう」

時間は深夜、世界は漆黒。その空には月が妖しく輝いていた。

彼は言っでは失礼かとは思うが、強そうには見えなかった。

「君が協会から派遣された人かな?」

彼はその容姿通りの優しい声で聞いてくる。彼は女性受けしそうな容姿をしており、それに似合った礼儀も身に着けているようだ。

「ああ、俺は神谷直希だ。よろしく」

「僕は佐上瑞樹。よろしくね」

少し高圧的な態度になってしまったか、まあこれがデフォルトなんだから問題は無いだろう。

「それじゃあ、早速行きますか。君も協会から話は聞いているでしょ?」

「ああ、行きましょう」

話、今回の事件のことだろう。俺も協会から依頼を受けた際に説明は受けているので大体のことは知っている。今回のターゲットは人憑らしい、そう聞いていた。

「ふむ、そろそろか」

「え、何がですか？」

独り言のつもりだったのだから。普段は仕事を殆ど一人でこなしてしまっているから独り言が癖になっているのかも知れんな、これは注意しないと考えていることが漏洩するかも分からね。

「いや、毎回事件の発生している時間が今頃なんだよ」

そう、今までの殺戮の統計からこの時間帯、真夜中に起きている事が多い。今事件現場に彼らが辿り着いていれば丁度殺人鬼に出会うことができるだろう。尤もそのころにはヤツの“作業”は終わってしまっているかもしれないのだが。

「そうですか・・・瑞樹、大丈夫かな？」

「大丈夫だろう。瑞樹君のことだ、どうにかもう一人の人と連携して斃しているだろう」

「そう、かな・・・」

「ああ、気にしないでいいぞ。私が保証する」
「・・・」

黙り込む彼女、何が言いたいんだ。

「私の保証じゃ心配かい？」

でも怜美クンだって彼がそんなヤワじゃないって分かっているだろう？」

「・・・うん。」

「なら大丈夫だよ。」

「うん。」

どうやらちゃんと納得してくれたようだな。

それにしても瑞樹君は中々どうして、彼女に心配されてるじゃないか。幸せ者なんだな、彼は。

..

「ん、もうこんな時間か」

気付いたらあれから一、二時間経っていた。

「何か予定でもあるんですか？」

「ああ、少し出かける予定があるんだ。

今から行くけどシャワーは向こうのを使ってもらって構わないし、寝るのならその部屋を使ってくれ」

「はい。でもどこへ行くんですか？」

「仕事にな」

そう一言告げて夜の世界に擬態するような黒のコートを羽織って外へと出て行く。外の空気は冷たく肌に突き刺さった。

紅い世界。いや、紅く彩られた世界と表現するべきか。

その紅く彩られた世界の中心には紅く彩られた奇怪な形をした“モノ”。その中心は大きく切り開かれており、その中はぐちゃぐちゃに掻き雑ぜられている。夜風がその“モノ”の異常な匂いを運んできた。

「臭いくさな・・・」

「ああ、臭い。でもまだ腐っちゃいないかな」

確かに彼の言うとおり臭い匂いはする。しかしその匂いは腐敗臭という訳ではなく、ただ単に臭いだけだ。

「どうした、そんなに吃驚した顔をして」

「いや、何でそんなに分かるのか吃驚しただけだ」

「ああ、僕の場合はただの慣れだよ。そんな超能力者でもなければ宇宙人でもないからね。

君の場合は妖魔を相手にしてるから、こういう匂いは滅多に嗅がないだろう？」

「ああ。じゃあ瑞樹さんはこういうのに慣れているのか？」

「僕の専門はこういうのだから」

僕は魔術を専攻した能力者だから彼の様な対妖魔戦闘ではなく今回の事件のような対人戦闘に駆り出されることが多い。僕はこういう匂いに慣れてしまっている。

「へえ。で、こんな状況か・・・」

あたりに立ち込める死臭。

「まあ、予想していたよりはいい状況かな」

「どんな状況を予想していたんだ・・・」

僕としてはもつとこう、なんとか地面が紅一色に染まっていて、その中心に奇怪な形をしたオブジェが佇んでいる感じを想像していたのだが実際はそんなものではなかった。そんなに凄惨な惨状ではなく前回までの事件とは資料を見た限りでは趣の違ったものになっている気がした。

「いや、気にしないで貰えると嬉しいかな」

「・・・分かった」

あんなことを言う必要は無いだろう。なぜなら今は最優先事項があるのだから。

「“君”もこんな話は聞きたくないですよね、犯人さん？」

「「ッ!？」」

二人分の息を呑む声。別にこれは犯人が二人いるというわけではなく一人は隣の直希君のものだ。

「・・・くくく、せつかく“オレ”はこれからお楽しみの時間だったのよ・・・」

「お楽しみ？」

「そうだよ、この“オレ”の為だけの時間だな・・・」

そう言っただけで彼は影から出てきた。

彼は金髪を死臭を纏う風に靡かせ、その漆黒の双眸に僕達を映しながら出てきて、こう言った。

「楽しまなきゃ損でしょう、“センパイ”？」

序章第四幕

シャーーー・・・と言うシャワーの音がする。

その下で濡れているのは私の身体。きつと平均以上の胸もあるし顔も可愛いほうだと思う。だけど何故か彼は私に何の反応も見せてくれない。

「なんでかなあ・・・」

そんな私の声はシャワーの水がお風呂のタイルを叩く音に掻き消された。

夢幻のソラ 序章第四幕

「楽しまなきゃ損でしょう、“センパイ”？」

そう言い放った金髪の男。ほかの誰でもなく同じサークルの後輩、樟葉将人だった。

「樟葉、何故こんなことをする・・・」

尤も今までの経験から言わせて貰うとこんな質問は愚問でしかないのだが。

「こんなことをする理由ですか？」

そんなものありませんよ、血が騒ぐってヤツですかね？」

「・・・妖魔のか？」

後ろから赤いジャケットを羽織った少年、神谷直希が現れてそう問いかけた。

「いや、大鬼の血がじゃないのかな樟葉・・・いや、クスハマサト？」

彼の言葉を訂正し、“樟葉将人”であることを棄てた“クズハマサト”へ問いかける。彼は既に“ヒト”ではなくただの“ヒトツキ”だ。

「くくく・・・そこまで調べがついているだな、協会とやらは」

「いや、協会はそこまで手を回してないだろうね。そうでしょ、直希君」

「・・・ああ、人憑だとしか言われてないな」

「フフ・・・じゃあお前が“オレ”に気付いたのか」

「気が付いたのは僕ではないよ、大学の先輩ね」
「気が付いたのは黄空さんだ。気が付いた、と言うよりは推理した、というほうが正しいのかもしれない。でもこの際そんなことは関係ないので口を噤んでおくことにしよう。」

「くくく・・・そうか。参ったなあ。これじゃあ本当にやっちまうしかないか」

「やっちまう、俺らを倒すってか？」

「ああ、この“オレ”が負けるわけ無いだろう。なあ！」

そう“クズハマサト”が言った瞬間、ヤツの眼が地面にまき散らかされた“モノ”のように深紅に染まった。それが人憑きとしての、大鬼としての力が出たことを示していた。

世界はもう暗黒に染まっていた。ふと見上げると同じような漆黒の闇の中にまるで幻のように儚く月が瞬いていた。

そんな空の様子が瑞樹の行末を暗示しているような気がして軽く憂鬱な気分になりながらも私は黄空さんの事務所の屋上から降りる。

「やっぱり不安だな・・・」

黄空さんは大丈夫だって言ってくれてはいたけどどうも心配になる。

これは私の心配のしすぎなんだろう、今回は私は行かなかったけれど協会のほうから人が来るみたいだし大丈夫だよ。

「でも大丈夫だよな・・・ここかな」

ドアを開けるとベットが置いてあってその周辺に筆筒などが置いてある部屋だった。多分ここが黄空さんの言っていた部屋なんだよね。

「ふあ・・・もう寝よ」

そこにあつた高級そうなベットに身を落として眠りにつくことにした。

「ああ、この“オレ”が負けるわけ無いだろう。なあ！」

そうヤツが言った瞬間、ヤツの眼が深紅に染まった。少なくとも僕にはそのように見えた。その変化は直希君にも視認することができたようで彼は瞳孔を大きく拡張させていた。

「直希君、大鬼の眼は何色かい？」

「紅い・・・な」

「ふうん、やっぱり“樟葉将人”に憑いていたのは大鬼で確定かな」人憑の特徴として人憑としての力を解放したときその憑いているモノの特徴が顕れる。今回のケースでは大鬼の特徴である不気味な紅い眼が“クスハマサト”の眼に奇麗に顕れている。

「それじゃあ、直希君は準備良い？」

「ああいつでもいけるぜ」

「じゃあ始めるよ」

これは開戦の合図。相手もそれを感じ取ったようで身構えた。僕は一言呟いて臨戦態勢に、直希君は懐から一枚の札を取り出した。しかし・・・

「何、消えた!？」

その瞬間ヤツの姿が消えていて

「シャアアアア！！！」

ヤツの体は僕のすぐ隣、そしてその手に持ったナイフが頸に迫っていた。しかし自分でも驚くぐらい冷静でいれた、隣で直希君が驚いた顔をしていたが内心僕も同じだ。

しかし僕が冷静でいられたのも黄空さんの教えのお陰かも知れない。

「甘いね」

「ッ！？」

ガキンツ、と言う金属がぶつかり合う独特の轟音が辺りに鳴響き、ヤツの身体は大きく跳ね飛ばされた。

「直希君、ただの防御魔術だよ。そんなことより、あれどうにかできない？」

「・・・まあ、やってみる」

その彼の返答を聞くや否や僕は大学へ行くときに家から持ち出した物、傍から見ればただの文庫本にしか見えないものを取り出した。

「シャアアアア！！！」

ヤツ、“クズハマサト”が奇声を上げながら瑞樹さんの頸元へと迫っていた。

しかし事は俺が行動する前に決着した。路地裏にガキンツ、という音が鳴響きヤツの身体が宙を舞っていた。

「直希君、ただの防御魔法だよ。そんなことより、あれどうにかできない？」

よほど俺が惚けた顔をしていたのか彼が声を掛けてくれた。

「・・・まあ、やってみる」

あれというのは恐らく今回の黒幕“クズハマサト”のことだろう。

何故か文庫本を取り出してそれに目を落とした彼を尻目に俺はあれをどうにかするために手に持った札を翳した。

——光が見える。

恐らく外から“召喚”されるのだろう。

私は使い魔だ。それだから“召喚”されるのも日常茶飯事。

『我、汝を呼び出すものなり——』

彼の声が聞こえる。しかし声がやや焦っている様な口調だ、直ぐに戦闘ができるような格好で準備をしておいたほうがいいだろう、そう思い私は背に負った弓を手を取った。

序章第五幕

“俺”は小さいころから“オレ”を飼っていた。

何時だろうか。“俺”の飼っていた“オレ”が暴走し始めたのは。

何時だろうか“俺”が“オレ”になったのは。

何時だろうか“オレ”が“俺”を見失ってしまったのは。

何時だろうか“俺”が闇に投げ込まれてしまったのは。

——何時だったのだろう“俺”が空^{カラ}になってしまったのは——

夢幻のソラ 序章第五幕

「我、汝を呼び出すものなり、汝の力我に貸さんとするならば汝ここに顕れんとす」

瑞樹さんが文庫本らしき本に目を落としながらそう語りだした、いや『語る』というよりは『詠む』と言ったほうがいいのかもしれない。何故なら彼のその言葉が滑るように紡がれていたからだ。

しかしその前にやるべきことがある。

「クズハマサト”だったか？」

「ああ、“オレ”は“クズハマサト”だな。まあ“俺”は“樟葉将人”でもあるのだが」

そう言うと言ッ“クズハマサト”は、くつくと愉快そうに嗤^{わら}う。その姿が何か異様な物で悪寒が背中を走った。

「それにしてもお前。“オレ”に殺されに来たのか？」

そう問いかけて言ッは地面に転がっている深紅のモノを手にとって、「こいつらみたいに」

その手に持ったモノをぐちゃり、と握り潰した。そのせいで手が紅くなったヤツに言い放つ。

「・・・ふ、お前に殺されに來ただって？ 莫迦莫迦しい」

「何だ、違うのか。今夜の楽しみが増えたかと思っただじゃねえか。

まあ楽しみが増えたことには変わりない・・・な！」

ヤツが飛び掛ってくる。流石人憑とでも言っておくべきか、かなり速い。

「楽しみは残念ながら増えないな」

「ッ！？」

式神を放つ。しかしそれは人憑の人並み外れた反射神経と運動神経でかわされてしまう。そして目の前に振り下ろされる銀、ナイフの刃だ。

その銀が目の前に鮮やかな曲線を描いたが幸い血が散ることは無かった。

「ふう、瑞樹さんそろそろいいですかね」

しかし瑞樹さんは何かをまだ詠っていた。しかしそれももう終わったように俺の方へと微笑を一つ向けて、

「出でよ我が力の化身、ファミリア＝レン！」

そう叫んだ刹那、地面に魔法陣が描かれた。

「我、汝を呼び出すものなり、汝の力我に貸さんとするならば汝ここに顕れんとす」

恐らく文庫本にしか見えないものを開きそこに書いてある詠唱文を詠唱し始める。この本はうちに伝わっている魔術書だ。その魔術書の召喚の頁を開き詠唱している。

「力を司る総ての霊神、我に力、その化身たる使い魔を。」

直希君はどうやら相手の気を殺いでくれている。

「我が盟約の下、ここに呼び出されし者——」
来た。

「——出でよ我が力の化身、ファミリア・レン！」

刹那、地面に青白い光を幽かに放つ魔法陣が形成された。そこに光の粒子が集まってくる。

これは今までにも数多く繰り返してきた行動なので僕は慣れているが他の人は異質なものを見るようで呆然と見ていた。

そんなことをやっているうちに魔法陣に人の形をしたものが形成された。そしてその周りにある光の粒子が弾けた。そこにいたのは

「我が主、^{マスター}瑞樹と霊神との盟約の下ファミリア・レン、ここに」

蒼髪を後ろで一束にまとめ、腰に剣、手には弓、そして身体に鎧をまとった少女。間違いなく僕が使役をした使い魔、^{ファミリア}レンだった。

そのレンが僕のほうを向き跪いている。これは彼らからすれば異様な光景なのかもしれない。しかし今はそんなことを考えている場合ではない。

「レン、状況判断はできるね」

「はい。あの方が協力者で、あれが^{ターゲット}人憑、今回の標的ですね」

「ん、正解。それじゃあ、行くよ」

彼女は剣を手に、僕は魔術書を片手に人憑へと走り出した。

：

戦闘が始まった。そう言うが実際に戦っているのはレン一人だ。僕や直希君はあくまでも後方支援程度、それほどにレンは強いのだ。

「なあ、瑞樹さん。それって何ですか？」

それ、と言うのは恐らく今、僕が持っている文庫本サイズの本のことだろう。

「これは魔術書、で分かるかな」

「魔術書って言うって魔術の詠唱文が書かれた本ですよ」

「そうだよ。で、今やったのは召喚魔法。使い魔、今回はレンを召喚したんだ」

「なるほど」

召喚魔法は使役魔法とも呼ばれ、召喚獣、使い魔などを召喚し、使役する魔術のことだ。

「それじゃあ僕はレンと一緒に戦ってくるから」

少しレンが苦戦をしているようだった。

...

銀の曲線が目の前を通り過ぎる。ややその銀が紅に染まっていたのは気のせいではないのだろう。そのナイフを振り翳したのは紅眼を妖しく光らせている人憑だ。

「・・・まったく、大鬼なら大鬼らしく戦ってほしいよ」

「こつちのほうか嬉しいからな」

独り言にヤツが言葉を返した。

「嬉しい？」

「ああ、嬉しいな。こう、人も切り裂いていく瞬間の感触がな」

まったく人憑の感覚は分かったものじゃないな。普通の感覚ではないから分かるはずもないのだが。

それはいいとしてこんな話をしているほどヤツも暇ではないはずなのだが、いいのだろうか。

「私を忘れられては困るものだ、人憑」

「ッ！？」

ヤツが振り向いたが時既に遅し。レンの放った矢がヤツの胸を貫いていた。ヤツは怨めしそうに僕のほうを見たのだが次の瞬間には力

尽きて地面に伏した。

「直希君、もう終わったよ」

「・・・ああ。それにしても俺が来た意味はあったのか？」

「まあ戦闘的な意味ではレンが一人で対外のことはどうにかしちゃうけど、」

そう言っでレンの頭を撫でてやると嬉しそうな笑みを浮かべる。

「召喚するまでの時間稼ぎをしてもらうためにもパートナーがいてもらわないと困るからな」

「なるほど」

納得したのかそうでないのか彼は曖昧な表情のままで頷いた。

「マスター、怜美は今日どうしたんですか？」

「体調不良で休んでもらってる」

「瑞樹さん、怜美さんって誰なんだ？」

「普段のパートナーだよ。今日は来れないみたいだったし相手が小鬼だったから君に来てもらったんだ」

「そうなのか」

そんな話をしていたらカツカツとハイヒールが舗装された路地を叩く音が聞こえてきた。

それを聞くと直希君は身構える。そんなことしなくてもいいのだが。

「直希君、身構えなくてもいいよ」

「え？」

「まあ、見れば分かる。貴女という人もそんなことしなくてもいいじゃないですか、煩わしいですよ」

「・・・瑞樹君には流石にばれてしまったか」

そう言っで暗がりから姿を現したのはこの闇夜に擬態するような漆黒のコートを羽織った女性、水瀬黄空さんだった。

彼女は微笑を浮かべながら僕たちを見、紅に染まった地面を見、最後に先程息絶えた“クスハマサト”を一瞥してこう呟いた。

「ほう、丁度終わったところかな」

「何でいつもこう黄空さんは終わった直後に来るんですか？」

「さあ、天啓とでも言っておこうか。尤も神など私は信じてはいないが」

「はあ、そうですか」

一緒に戦闘に参加してくれればいいのに、と心の中で付け加えておく。

「それじゃあ記録を取るけど止めを刺したのは・・・レンかな？」

「はい」

「そうだと思ったよ」

黄空さんはそう言うと言っていたメモ帳に今回の事件の記録を事細かに取っていく。しかし状況を理解できていない人が一人この場にいた。

「瑞樹さん、彼女は誰だ？」

この場の唯一の協会からの派遣者、神谷直希だ。

序章終幕

「まあ、見れば分かる。貴女という人もそんなことしなくてもいいじゃないですか、煩わしいですよ」

「・・・瑞樹君には流石にばれてしまったか」

路地裏から姿を現した女性は闇と同じような真っ黒なロングコートを羽織り赤い眼鏡を掛けた大人びた女性だった。

瑞樹さんと彼が召喚した少女——レンと言ったか——は知り合いなように話を進めていたが俺には分からないことがあった。

「瑞樹さん、彼女は誰だ？」

夢幻のソラ 序章終幕

「瑞樹さん、彼女は誰だ？」

確かに彼はそう言った。彼は黄空さんのことは知らないからこの反応は当たり前のことなのだろう。

「ああ、説明がまだたつたかな・・・」

そう言つて説明を始めようとしたとき、

「いいよ瑞樹君。私が説明する」

「はあ・・・じゃあ記録の続きでも取っていますね」

「いいよ、取り終わった。後は当事者である君が状況について書いてくればいい」

記録というのは協会へと提出する事件に関する事項をまとめた書類のことだ。僕が関係する事件の記録は大概黄空さんが取ってくれている。

「レン、相手はどのくらいのランクだったか？」

「私の手ごたえだとB程度ではなかったかと」

「ありがとう」

ランクというのは人憑や異端などの強さを表すものでA～Eまでのランクがある。このランクは協会のほうで管理され研究の際の一つの指標となるらしい。

「マスター、私はもう戻ってもいいですか？」

「うん、もういいと思うよ」

「分かりました」

そう言っていると彼女の足元に魔法陣が顕れ、彼女の姿は光の粒子となって消えた。

「あ、黄空さん。そっちももう終わりましたか？」

「ああ、説明も終えたよ」

「それじゃあこれが今回の記録です。レンにも訊いて書いておきましたんでもうこれで提出できると思います」

「分かった。私は直希君とこの片付けをすることにするから君は先に事務所に戻っていてくれないか？あと先に休んでもいいからな」

「ええ、分かりました」

今事務所には怜美もいるはずだ。きっと彼女も怜見のことが心配で僕を帰らせているのだろう、それは僕は分かったのでさっさとこの死臭の漂う路地から抜け出した。

：

「はあ、すつきりした」

ここは黄空さんの事務所ではあるのだが実際は協会との窓口になっている気もしないでもなく僕は結構ここに通つてたりするのでシャ

ワーを使わせてもらった。実は着替えも置いてあったりする。

「で、怜美はもう寝たのかな？」

シャワールームが微かに濡れていたので怜美が恐らく入った後なんだろう。ということはこの寝室に、

「・・・いた」

彼女は可愛い表情をして静かに眠っていた。そのベットのそばの椅子に腰掛け暫く彼女の寝顔を眺めていることにしようか、いつ見ても彼女の寝顔は見飽きないからな。

「まったく、派手にやってくれたものだ・・・」

私の目の前に広がるのは紅い海。そしてその中にポツンを浮かんでいるのは奇怪な形をしたモノ。

「直希君、この辺りに撒かれている妖気を消せるかい？」

「ええ、まあできるかと思います」

妖気、先程の人憑となっていた大鬼から発せられた妖気で、それを喰い取る為に下級妖魔が集まってきて混乱の素になってしまう。そのため無駄な妖気を消してもらったために直希君には残ってもらっていない彼もそれは承知しているのだろう。

「じゃあ、私はこの死体のほうをどうにかするか・・・」

四散しているかつてヒトだったモノ。その総てを魔術を使って掻き集める。まったく・・・今回は何人分あるんだろうな。

「水瀬さん、大体消しましたよー」

「ああ、直希君ありがとう。もう戻ってもらっていいよ」

「分かりました」

彼を残した理由は妖気の消去、それだけなので彼には帰ってもらっていい。だがまだやるべきことはある。

「ここにも居ないのか・・・“彼女”は」

彼女とは数年前、青山市の森林の上空で起きた航空機空中爆発事故。その航空機史上最悪の事故とも言われる事故の被害者である一人の少女、唯一事故機内で死体の見つからなかった少女、それ故に未だに行方不明になっている少女のことだ。そして協会はその少女の行方を捜している。理由は実に単純明快で、その少女が何らかの能力を使いその事故現場から脱出したと考えられているからだ。そんな能力者と考えられる少女はこういう事件の現場に現れ易い、それが協会の考えだ。

その協会の方針に従い私もその少女を搜索しているのだが私にはもうひとつの理由がある。そう、もうひとつの理由だ。

「・・・やはり今回もはずれなのか」

しかし“彼女”はまだ見つかっていない。そう思い私も路地から出た。

危なかった、もう少し彼女が詳しく調べていたら私は見つかったかもしれない。見つかったら最期、私は束縛され私の目的は達成されず、奴らの言いなりになるしかなくなってしまう。

そうなたら破滅だ。永久に“彼”を見つけることができなくなるし私の身が危なくなってしまうかもしれない。

「次は藍川にでも行ってみるか・・・」

月は黄金に妖しく輝いている、そして私の髪は銀色に煌いていた。

「ん、朝かな・・・」

窓から光が差し込んでいた、間違えようの無い朝だ。私は朝にはしつかりと起きるようにと心がけているからベットから起きる。・・・ベット？

「そうか、私昨日黄空さんの事務所で寝たんだった・・・と、瑞樹？」

目に入っただのは机に突っ伏してすやすやと寝息を立てている瑞樹。そうか、昨日帰ってきてくれたんだ・・・きつと疲れたんだろうな。しかし私の性格が何かなのか彼のことを起こさないと気が済まない私がいる。

「瑞樹、起きて・・・瑞樹」

「・・・う、うん・・・怜美？」

「おはよう」

「・・・おはよう、痛たた・・・」

机で寝てたせいか痛む背中をさする彼。そんな彼を見て私は一人微笑んでいた。

第一章第一幕

夢を見た。それが夢だとわかったのは目の前にもう一人の自分がいたからなのか、景色が黒一色だったからなのか・・・それとも目の前の自分の中心に穴が開いていたからかもしれない。

その目の前に佇んでいるもう一人の僕は酷く悲しい表情をしていて酷く儚げな風貌をしていた。そして、

「久しぶりだね、“お兄ちゃん”」

そう言った。一瞬彼の姿が少女のように見えたがその姿は夢に相應しく深い闇の奥へと沈み、消えていつてしまった。そこに“彼女”がいたことを知らせるのは幽かな残響だけになってしまった。その声は僕の中で酷く悲しく、酷く懐かしく響いた。

夢幻のソラ 第一章第一幕

「・・・ふうん、変な夢だったね。でも夢が変なのは当たり前なのかな」

「そうなんだよな」

彼女に今日見た夢の話をしたとき、彼女は先程のような返答を寄越した。返答までに少し合間があったのはそんなに気にするべきことでもない、そんなことより重要なのは・・・

「怜美、ちよつと今日遅れそうじゃないか？」

「あ、本当だ・・・」

講義に遅れそうな時間だった。

：

「あ、先輩おはようございます」

背後から聞こえてきたのは間延びした女性の声。先輩、というのは僕も含まれるだろうが主に隣を歩く怜美に掛けられた声だろう。何故なら声の主は怜美とより仲がいいから、という簡単な理由である。声の主は一年の清浦梓きよはら あずなさんだ。なにやらデジャヴを感じるのだが、先日の樟葉将人のように隣にいる怜美に変化は見られないしどちらかというと仲良さそうにしているので人憑でも異端でもないだろう。「あ、そういえば梓ちゃん。大晦日行ったよ、可愛かったよ」「はうっ、先輩、見てたんですか？」

「見てたよ。それにしても隣に座ってた男の子みたいな子って誰なの？」

男の子みたいな子・・・ああ、彼女か。僕も怜美と一緒に初詣に行つたからなんとなく覚えている・・・

「景ですよ、私の弟です」

「・・・おとうと？」

「そうですよ、気がつきませんでしたか？」

弟・・・本当か？

「なんなら今度読んできますよ、それじゃあ講義に遅れちゃうんで」

そう言つて手をひらひらと振つて駆けて行く。言葉遣いは天然がかつていて時々奇声も発するが流石に天然ではないだろう。今転んだけどただドジなだけだよ、うん。

「あ、怜美。僕たちも行かなきゃ」

「あ、そうだね」

本格的に遅刻しそうだ。

：

「おはよー」

「・・・おはよう」

で、急いで席に座った僕たちの今日のお隣さんは男女のペアだった。片方の男はのんびりした口調で話しかけてきてもう一人の女のほうは相変わらずな無愛想な挨拶だった。もうそんなことには慣れてしまっているのだが。

「啓一、佐奈おはよう」

「おっはよー」

そう言つて講義が始まるまで怜美と佐奈は話を始める。あの無愛想な佐奈が怜身とは結構話すんだから不思議だよな。

「なあ、啓一」

「ん、何ー？」

「佐奈って家でもあんな感じなのか？」

「違うよー、結構無愛想だよ」

彼と佐奈は所謂二卵性双生児だ。流石二卵性とでも言うべきか、性格が全く異なったものになっている。これが一卵性だったら性格が似ていたかもしれないがそもそも一卵性の異性の双子が生まれてくるのは奇跡にも等しいらしい、どうでもいいが。

「じゃあ、あれは何？」

「さあ、僕に聞かれてもねー。話が合うんじゃないかな」

「確かに・・・」

そう言つて二人顔を合わせて苦笑い。なんせあの佐奈が怜美と一緒にケーキの話題で盛り上がっているのだ。最近どこの喫茶店がケーバイキングを始めたとか、どこのケーキ専門店の新作がどうしたとか、そういう話だ。

そんなやり取りをしている彼女たちを見ていたら教授が入ってきて

講義が始まった。

『じゃあ水瀬君頼めるかな？』

「ええ、まあ特に強力な敵ではないようですし、いつもの二人でいいでしょう？」

『ああ、頼む』

「それじゃあ、今度は成功報酬の交渉で」

そう言つて彼との電話を切る。最後の一言は通例のようなものだからもう癖になつていゝるのかもしれない、そう私は思う。

時計を見るとまだ真昼だったので瑞樹君への連絡はまだいい、そんなことより事務所の仕事を片付けなければ取引先に契約を切られてしまふかもしれない、現に一回そんな経験がある。

「それじゃあ、片付けるか・・・」

勿論、仕事をだ。

...

気付けば窓の外の景色は橙色へと推移していた。

冬時なのでまだそんなに遅くは無いだろう、そう思い時計を確認。

「そろそろ瑞樹君に連絡を入れる頃合か？」

一人静かな事務所の中自分に問いかける。この作業には何の意味も無いのだが、普段一人で仕事をしているところというのに何の違和感も持たなくなつてしまつてゐる。そんな不思議な感覚に襲われながらも私は事務所の電話を手についた。

「瑞樹君はまだ大学構内にいるかな・・・」
帰っていたら彼としたら迷惑な話だろうな。

携帯が着信を知らせたのはまさに大学を出ようという時だった。小窓を覗くと相手は水瀬黄空となっていた。

「もしもし、黄空さん？」

『ああ、瑞樹君。ひとつ仕事を頼めるかい？』
「まず相手は？」

仕事。つまり異端、もしくは人憑の討伐である。黄空さんが言う仕事とは大体がそのようなことを指す。前に一度、事務所の仕事の手伝いをさせられたのだが、そんなことはあれ以来無い。

『ああ、ランクはD、E程度の下級異端だな。どうだ、引き受けてくれるか？』

「んゝ、ちよつと待ってください」

そう前置きをし、一度電話から顔を離す。

「怜美は大丈夫か？」

「私はいいよ。ここ最近仕事に出てなかったけどどうにかなると思うから」

「ああ、分かった。・・・ということで黄空さん。怜美も一緒に行くんですよね」

『その通り。それじゃあこれから来てくれるか？』

「ええ、分かりました」

そう言って通話を切る。そして怜美と一緒に黄空さんの事務所へと向かった。

：

話は単純明快だった。依頼の内容はただの異端の討伐。場所は藍川市の路地裏、時は深夜帯でなんら変哲の無い依頼内容だった。

しかし今回は違う状態にあることがあった。それは、

「何なんだ・・・これは？」

「・・・何なんだろう、誰か先に来たのかな？」

僕と怜美、二人揃って頭をかしげる状態、恐らく今回の標的^{ターゲット}である男が既に息絶えていた、胸に大きな穴を開けて。

しかしその胸の大穴からは血の一滴どころか何の塵も出ていないような状態で、この光景をより異様なものにしていた。そんな異様な光景の中、ひとつの声が聞こえてきた。

「——ふふふ、藍川に来て見て正解だったのかな・・・」

鈴を鳴らす様な清らかな声音、その声の聞こえたほうを見ると、

「っ、人憑か・・・？」

銀の髪を風の中に煌かせ、金の瞳を妖しく耀^{かがや}かせる少女が路地の壁に一人佇んでいた。

「ふふ、そんな野蛮なものと一緒にしないでよ、私の名前は“イザナミ”、まあ仮の名前だけどよろしくね」

彼女、イザナミはそう鈴の音で言った。

第一章第二幕

「ふふ、そんな野蛮なものと一緒にしないでよ、私の名前はイザナミ、まあ仮の名前だけだよろしくね」

やっと見つけた。ずっと探していた彼。私がこの力に目覚めてから、“彼女”に憑かれてからもう十年以上探し続けていた彼をここで見つけた。

「久しぶりだね」

「——！」

私がそういった瞬間彼が息を呑んだ。そのような感じがした。

夢幻のソラ 第一章第二幕

目の前に自らをイザナミと名乗った少女がいる。路地の塀の上に立ちその月のような丸い金の双眸で僕らを見下ろすその少女は次の瞬間こう言い放った。

「久しぶりだね」

「——！」

その言葉を聞いた瞬間違和感を覚えた。

違和感の正体は何なのか、それが分かった瞬間、世界が回った気がした。目の前に夢に出た少女がいる。その事実を脳が受け付けないのか世界は黒く塗りつぶされていった。薄黒の中確認できたのは怜美の叫ぶ声と夢と被った少女の姿だった。

：

目が覚めたのは自分のベットの上がった。そして隣でベットにもたれかかるように寝息を立てている怜美。

時計を確認すると既に朝の五時を回っていた。

「――あの時気絶したのか・・・っと」

彼女を起こさないように抱きかかえベットへと寝かす。どうせ今から寝てもそこまで寝れないのでリビングへと行くことにしよう。しかし、

「瑞樹君、起きたのか」

イレギュラー。なんとそこには黄空さんの姿があった。

「・・・なんで黄空さんが？」

「気にしないでくれ、そんなことより大丈夫だったかい？」

気にしないでくれ、じゃ無いですよと心の中で付け加えながらも会話を進める。

「僕、気絶したんですよ」

「ああ、そうだな。それで何かあったのか？」

自分でも分からない。自分でわかっているのはイザナミと夢の少女の姿が重なったということだけだ。

夢、穴の開いた僕とそこに浮かび上がった少女の夢だ。

「ふむ、なるほど・・・」

「黄空さん。何か知っているんですか？」

「その少女、イザナミといったんだね」

「ええ、そうでした」

「少し調べ物するから今日は帰らせてもらっよ」

言うや否や、すばやく彼女は立ち上がり玄関から出て行った。夢の少女と銀の髪を持つ少女、この二人に何か関連はあるのだろうか。心の底で何か蠢いている気がした。

「ここも違う・・・ここもか・・・」

——NAL（日本エアライン）、航空機事故名簿1993——1993年の日本エアラインの航空機空中爆破事故の被害者名簿だ。そして協会の資料が正しければここに彼女が名を連ねているはずだ。

「・・・佐伯雄介、死亡、佐伯晶子、死亡、坂井礼二、死亡・・・いた。^{さがみずえ}佐上瑞枝”、行方不明」

自分でも分かったぐらい口元が釣り上がった。佐上瑞枝、その被害者名簿の写真には彼と良く似た少女の姿が映っていた。漆黒の長髪に丸い黒の目をした少女だ。

「ん、これは・・・」

そこで、目に留まったひとつの資料。

「ちっ・・・面倒なことになるか？」

この事実気付いてしまった私はすぐさま電話を手に取りダイヤルを回した。

「うーん、どういふことなんだろうな」

僕が今悩んでいるのはあの少女のことだ。銀色の髪を持ち赤い瞳をしている少女、イザナミのことだ。

その彼女は僕に久しぶりと言った。そして彼女と姿の被った夢の少女も僕に久しぶりと言っていた。

あれは正夢だったのか、いや違うはずだ第一、夢の彼女と現実の彼女は全く違う人物に見えだし、それに夢にしろ現実にしろ僕にあん

な知り合いは居なかったはずだ。

「・・・あ、怜美起きたのか？」

「うん。で瑞樹は大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫」

「よかった」

きつとあのときに急に気を失ってしまったから怜美も気に掛けていてくれたんだろう。

「ありがとな」

そう一言お礼を言っておいて朝食を作り始めた。

...

「久しぶりに瑞樹のご飯食べたね」

「そうかな？」

でも良く考えてみたら結構ご飯を作っていなかった気もしないでもない。僕って結構怜美に食糧依存してるかも。

「そうだよ。こんなに美味しいなら作ればいいのに」

「でも、怜美の料理も美味しいと思うんだけどな」

別に自慢でもないが僕は料理は得意だけど怜美もかなりの腕前だと思う。でなけりゃ毎朝料理をしてもらわない。

「・・・」

彼女が妙に静かだと思って彼女のほうを向いたら顔を赤く染めて俯いてしまっていた。ありやりや、またやっちゃったよ。

「おい、怜美？」

「・・・」

「おい・・・」

・・・駄目だ返事が無い。怜美ってこうなっちゃうと暫くフリーズしちゃからなあ。

それじゃあご飯を食べ続けるか。

「これか・・・」

協会の地下図書室。歴史の影に埋もれてきた事件などの大概の書物がこの地下図書館には保管してある。

そこで私が探していたのは力行ア段の本、いくら力行ア段といえどもそれだけで書物は500以上あるので探すだけでもう一時間ほどかかってしまっている。

「^{かみつき}神憑”、か・・・」

神憑、人憑の類ということは私も知っているがそれ以外のことは殆ど知らなかった。今までに確認された神憑の個体が少ないせいも情報も乏しい。そのため神憑自体の存在を知らない人も多いらしい。

「これ借りていくよ。水瀬黄空、1936だ」

「はい、ID1936水瀬黄空さんですね・・・照合終わりました。どうぞ」

「ありがとう」

司書に自分の名と協会所属IDを告げ本を持ち出す。神憑についての研究はまだ足りない、そう思うからだ。

「さて、これは本格的に面倒なことになるか・・・」

今日、数回目の溜息を吐いた。

第一章終幕

「やっぱり覚えてないのかなあ・・・」

一人呟く私。外から見れば一人呟いているだけなのだが実際は違う。
『やっぱりそうなんじゃろうな』

「そっか、じゃあ今夜も逢いに行こうかな」

『そうなら妾^{わらわ}も力を貸すぞ』

「ありがとね」

“彼女”も力を貸してくれる。きっと大丈夫、今夜こそ彼と話そう。

夢幻のソラ 第一章終幕

「ふむ、やはり彼女が神憑。しかもかなり上級だと貴女は言うんですか？」

「まず間違いないでしょう、この資料と見事に合致しますからね」
彼の目の前に出したのは一冊の資料。地下図書館で借りてきた本の中の一冊だ。

「相変わらず君は仕事が速いね。まだ電話を貰ってから一時間とかかってないはずだけど」

彼は懐から出した懐中時計を見、そう呟いた。

「その辺は秘密です」

含み笑いを交えて話す。特に意味は無いが。

「で、彼女は一体どこにいるんだ？」

「おそらくは青山か藍川ですが、何故？」

「んゝ、一応“知り合い”としての責任だな」

知り合い、彼女とはそんなつながりでもないだろうと思うんだが。

「ははは、何でそんな言い方をするのか、って言いたそうな顔だね。べつにそんな深い意味も無いんだけど」

「じゃあ何故？」

「相手が人憑、いや神憑だからかな」

「成程」

協会に身を置くものとしての心構えなのだろう。

「それじゃ、そろそろ彼らも来ることだから僕はもう帰るか」

そう言っただけは扉に向かうため背を向けた。

「顔を合わせにくいでしょうからね。貴方も彼も」

「・・・その通りだな」

きつと彼の顔が今、見れたら苦笑いをしているのだろう。

「ましてや僕がこんな世界にいる人間だ何て予想もしてないだろうしな」

そう言い残し、扉が閉まる。こんな世界にいることを予想していない、か。

確かにそうなんだろうな。

「なあ、怜美」

「どうしたの？」

もう僕はご飯を食べ終わって僕より食べるのが遅い怜美を待っているときにふと思って彼女に聞いた。

「いや、怜美ってあのイザナミっていう子に見覚えがある？」

「イザナミ・・・ううん、無いよ」

「そうか」

僕は彼女を見た途端、見覚えがあるというか既視感のようなものを覚えたのだ。原因はおそらくはあの夢、昨日の夜見た彼女の夢だろう。僕であり僕で無い彼女の夢。

しかし夢の彼女と現の彼女^{うつ}は明らかに違いすぎた。片や黒髪、片や銀髪。これでも大きな違いだ。しかし僕は彼女とあったことは無いはずだ。そう、あるはずが無い。

「うーん、結局誰なんだろう」

僕の記憶には無い。僕は昔から記憶力のいいほうだと言われてきていて、幼稚園のころの記憶とかも残っているが、彼女に関する記憶なんてほんの一欠片もない。

「あれ、怜美？」

「・・・」

「怜美？」

「・・・あつ、瑞樹どうしたの？」

「いや、怜美が妙に静かだったからどうしたのになって」

静か、というよりは思案顔だった、というほうが的確なのかもしれない。

「うっん、なんでもないよ！」

やや焦り気味に言っているのでも信憑性がない。明らかに動揺していて、「私知っています」と暗に言っているようなものだ。

「本当？」

「う、うん」

やはり確実に彼女は何かを知っている。僕の知らないイザナミに関する何かを――

———— P L L L L L L L L ————

「ちよつとごめん」

受話器を手に取る。すると聞こえてきたのは気の強そうな女性の声、黄空さんの声だった。しかし今日の彼女の声は何か、今日は彼女

の声にいつも以上の覇気が籠っていた。

「どうし——『瑞樹君、今日、今から来てくれるか!?!』」

この声を聞いたとき僕がはじめて思ったことは「何故?」と言う疑問だった。

「黄空さん、どうしたんですか?」

『イザナミ、彼女の正体が分かったんだよ!』

「正体?」

普段に来れば幾分か興奮しているように感じる彼女の声。いや、確かに興奮しているのだろう。

『いや、彼女の正体というよりは君の感じていた“違和感”の正体といったほうが的確なのかもしれないな』

「違和感の、正体?」

違和感。間違いなくあの既視感、デジャヴのことだろう。この違和感のことは今朝早くに黄空さんには話してあるし彼女は早くも何かを掴んでいるのだろう、そう考えるのが妥当だ。

『そう、違和感の正体だ。君の話していたあれだ』

「で、今すぐに行けばいいんですね」

『そうしてもらえると嬉しい』

言外に今すぐにでも来い、そう言っているのが聞こえるのは悲しむべきか。

「はい、じゃあ今すぐ行きますよ」

『ふむ、それではな』

その言葉を聞き、受話器を元に戻す。ふと怜美の座っているテーブルのほうを見ると、またもや思案顔で黙り込んでいる怜美の姿があった。

普段の明るい性格からは全く想像できないような暗く、沈んだ表情で何か、おそらくはイザナミ関係のことを考えている。やはり彼女とイザナミは関係があって、きっと僕にも間接的な何か関わりがあったのだろう。その僕は覚えていないのだが。

「怜美、今日はどうやら大学休むことになりそうだよ」

「・・・え、どうしたの？」

反応が遅い。まあどうせ僕が問い詰めたところで怜美は口を割ってくれないだろうな。

「いや、黄空さんが今すぐ事務所に来てほしいって」

「うん、分かった」

彼女の真意は分からないがそれはいい。僕も早く出掛ける準備をするとう。

...

「で、黄空さん。分かったことって何なんですか？」

今、僕たちがいるのは黄空さんの事務所。相変わらずのアンティークの物品に囲まれて話をする。

「結構重要なことだな。まずこれを見てくれるか？」

黄空さんが差し出したのは一冊の本。

「『NAL航空機事故名簿1993』・・・ですか？」

「ああ、覚えてるか、あの1993年の大事故を」

——事故・・・

「何ですかそれ？」

「えっ、瑞樹覚えてないの？」

覚えてないのって・・・正直そんなもの記憶に無い。怜美は知っているのか？

「うん、覚えてないな」

「・・・やはりそうか」

黄空さんは妙に納得したように言う。やはり・・・一体どういってとだろうか。

「え、どういうことですか？」

「まず違和感の正体から言おう。それは――」

――その言葉を聞いた途端、僕は驚きのあまり立ち上がった。

第一章 空虚心情ノ了

第一章終幕（後書き）

一応、一章はお終い。どうも区切りが悪かったかな？

間章一

——1993年5月23日・・・

一機の飛行機が青山市の上空を飛んでいた。
日本エアライン、通称NALの旅客機だ。

夢幻のソラ 間章一 「異能咲華」

澄み渡る夏空に一筋の白い線が描かれていった。

それを描いている飛行機。 その中には定員には満たないがかなりの数の人、445人の乗客が乗っていた。

「あ、うみがみえるよー」

「ほんとだねー」

その中でも元気なのが幼い少女二人だ。 一人は黒い髪の長く伸ばしていてもう一人は二つに髪をまとめている、所謂ツインテールだった。そして下には、青山市のほかにも周辺の市も見え、その先には海も見えていた。

「こら、そんなにはしゃいたら他の人の迷惑になるでしょ」

「ごめんなさーい」

その二人に母親らしき人が注意をする。 しかし、ツインテールの少女はその女性にそっくりなのだが、もう一人の長髪の少女は似ていない。 その理由は簡単で、その少女は女性とその子供の知り合いと一緒に乗せてもらっているだけなのだ。
そのときだった。

——バゴオンッ！

そんな轟音が機体の右側から響いた。当然人はすぐさま反応をし、その轟音のなったほうを向く。そして、「エ、エンジンが爆発してるぞっ！」誰かが叫んだ。

しばしの静寂があつたもののすぐに機内は混乱に包まれた。泣き叫ぶ子供、暴れだす女性、混乱してうろたえる男性。そんな人が続出した。

ジャンボジェット機はエンジンがひとつ故障しても不安定にはなるが飛ぶことが出来る。しかし一般人がそんなことを知る由も無く、搭乗員がそれを告げようとしたとき、自体は最悪の方向へと動き出した。

——ドガンッ！

——ドゴンッ！

左右から二つの轟音。見れば左右のエンジンが爆発しエンジンは残り一基、しかし爆発により機体の翼は壊れておりもう墜落も時間の問題だった。

先程の少女も母親に泣きついており、母親は母親で混乱しながらも子供を宥めている。

しかし、機体はだんだんと地面に向かい墜ちていく。もはや成す術は無く、搭乗員も諦めたような表情をしていた。

その阿鼻叫喚の騒ぎの中、先程の長髪の少女のみ目を瞑り、静かにしていた。そして・・・

——ドッカーンッ！！

機体は青山市の山の中に頭から墜落した。

すぐに広がる機体から出た炎、そして人の悲鳴。しかしその悲鳴も次第に炎に飲み込まれ、消えていった。

そして救助隊の来たところには搭乗者のほとんどが焼け死んでいた、ただ一人の行方不明の少女を除いて。

：

夜の暗闇の中、一人の少女が森の中を疾走していた。

三、四歳かと思われるその背格好には似つかわしくない鋭利な雰囲気
を纏っている。しかしその顔には何の表情も無い、無表情だった。
そして、その少女の髪は白金に、眼は黄金に輝いていた。

間章一 異能咲華ノ了

第二章第一幕

バイクを飛ばす。そして並走しているのは怜美だ。彼女は僕がバイクの免許を取ったときに一緒に取る、といって免許を取ったのだ。今、僕たちが向かっているのは絹乃杜市の実家。近くに駅が無いので通行の足は自動車やバイクなどになる。それで僕たちはバイクに乗っているのだ。

何故実家に帰っているのかといえば先ほど黄空さんが放った言葉、それが原因だ。

夢幻のソラ 第二章第一幕

「瑞樹君、君には妹がいるんだよ」

この言葉を聞いたとき僕は驚きのあまり立ち上がった。僕は一人っ子だし親もそうだって言っている・・・いや、言うてはいないな。しかし妹のことなんて聞いたこともない。

「黄空さん、何の冗談ですか？」

僕の中の結論は冗談となった。

しかし、黄空さんの返答は予想を大きく外れたものだった。

「残念ながら本当だ。君のお父さんも証人になってくれるはずだよ。それと怜美くんもね」

お父さんと怜美が証人になるってどういうことだ？

ふと怜美の方を向くと困っているような驚いたような複雑な表情をしていた。

「怜美、それって本当？」

「う、うん。瑞樹は覚えてないと思うけど・・・」

僕が覚えていないのに・・・皆が知っている？記憶喪失、いや違う。記憶欠落か？じゃあ何故？

「瑞樹君、一回実家に帰って聞いて来たらどうだい？」

「今から・・・ですか？」

「ふむ、そうだな。どうせ大学も休むんだろう？」

流石黄空さん、と言うべきか。きっとこのことも全て考えた上で呼んだのだろう。全て彼女の掌の上で転がされていたわけか。

「怜美も行ってみる？」

「うん、私も行く」

「それじゃ、黄空さん。さようなら」

そう言つて黄空さんの事務所を出た。

「君も中々巧く言つたものだね」

瑞樹君たちが帰つたあと、また彼は姿を現した。

「覗き見なんていい趣味してますね」

「残念ながらただの盗み聞きだよ」

「はあ、同じものじゃないですか」

覗き見も盗み聞きも同じようなものだと思つのだが、彼の中では何かしらの基準が存在するのだろう。

「それで貴方は何故、こんなところに残っていたんですか？」

「ん、知り合いとしての責任？」

「そんな浅い関係じゃないでしょう、貴方と彼——瑞樹君は」

もつと深い関係があるはずだ。少なくとも知り合い、そんな浅い関係ではない。

「それじゃあ、上司？」

「巧い言葉を選びましたね」

上司、巧い言葉だ。

一応、彼は協会の上層部の人間であるからして協会に所属している瑞樹君とはその関係にあるのには間違いないであろう。

「褒めても何もでないよ」

「大丈夫です、何も欲しいとは思っていませんよ」

そう軽口を叩き合う。本当にこんなこととしていいのだろうか・・・

「で、いい加減急がないと不味いんじゃないですか？」

「ん、どうして？」

「話を聞いてなかったんですか。言っただじやないですか、実家に帰るって」

盗み聞きしていたでしょうに、と心の中で付け加え、その代わりに溜息をひとつ。

「それもそうだね。それじゃ僕は今度こそ帰るね」

そう言っただち上がる彼。そして帰っていく背中に私は一言語りかけた、独り言のように。

「——後はよろしく願いますよ、さがみ いっき佐上樹分局長」

彼の肩が一瞬震えた、そんな気がした。

周りには沢山の木々、そして日本家屋。間違いなくここは絹乃杜市だ。

絹乃杜市は市制を敷いてはいるものの、そこまで都市というわけもなく自然の多い市である。まあ、そんなことは別に関係ないんだけどさ。

「ふう、やっと着いた」

「でも今日は空いてたから、結構早かったんじゃないのかな？」

「それもそうだね」

大学のある青山市から見ればここはかなり遠いところに位置している。まず青山市とは県が違っている。まあ隣の県なのだが。

「それじゃ、行こうか」

「・・・うん」

目の前にある日本家屋、つまり僕の家だ。その門をくぐった。

：

結論から言つと家の中に両親がいなかった。

次に浮かぶ疑問、は当然何故か、というものだがそれはすぐに判明した。なぜなら家政婦長（うちの家は何か長い歴史があるらしく家がでかくて家政婦も数人いるんだ）の苑田さんが何やら出掛けていると教えてくれた。

「で、どうする怜美？」

「どうしようね」

二人揃って苦笑い。それもそうだ、僕の両親に聞きたい事があつてきたのに二人とも出掛けていたなんて想像もしなかったからね。

それにしても二人揃ってどこに行ったのだろうか、まさか旅行じゃないだろうな。そんなことだったらかなり面倒なことになる。

「瑞樹様、お茶と受け菓子を持ってまいりました」

と、この状況を打破するかのように部屋に入ってきてくれた、感謝。「ん、ありがと」

苑田さんの入れてくれるお茶はいつも美味しい。そういえばお茶菓子は手作りらしいし。苑田さんは万能だな、本当に感謝しなきゃな。怜美も美味しそうにお菓子食べてるし、親がいなくて良かったかも。

夜、私がもつとも好きな時間でもある。この静かな感じ、この暗い感じが好きだ。

「また追手か・・・」

「G l g : i u f Y I + U f」

人として発することの出来ない言葉を発する“ヒト”が後ろから負ってくる。やつらも私と同じように夜の世界を好むらしく、よく遭遇しては戦闘を仕掛けてくる。

ま、別にそんなに強いわけじゃないから、すぐさま切り捨てる。

「* I g j v a f h」¥ V + f ツ！」

苦悶の言葉を発する“ヒト”から鮮血が舞うが気にすべきことではない。

「+ g u S S u i * I G + U C」

「あゝあ、死ななかつたか」

今回はしぶといな。右腕が完璧に斬り落とされているが、ヤツはそれを楯にして攻撃を避けたらしい。

「——これならッ」

手に持った大振のナイフで横一閃。私に“彼女”が憑いているといえども体が武器になつたりしない。

「+ U D F t s ! ?」

状況の理解できていない“ヒト”。しかしすぐに静かになる。

それもそのはずだ。今、私が薙いだのはヤツの頸部、首だ。その身体と離れた首は今、私がいるところ、高速道路の塀の上から転げ落ちて行く。道路には先決が撒かれているが、この暗闇の中に赤黒は目立たない。彼を追いかけよう。

そう決めた私は高速道路の塀の上を彼女の力も借りて静かにひた走る。

彼の故郷、絹乃杜。彼の陰を追って、懐かしい空気に触れるために。

第二章第一幕（後書き）

久しぶりに軽グロ

第二章第二幕

「ふう、やっと着いた」

暗闇の中疾走してきた甲斐があつた。どうにか夜明け前、といったももう薄日は差し込んでいるがここに着くことができた。

私としてはもう少し早く着きたかつただけと意外と追手が多かったから・・・と、隠れなきや。もうそろそろ夜明けだ、見つかったら大変なことになってしまう。

・・・よし、暫く“彼女”は休んでもらおう。そのほうが私の身を守る、そして彼も私のことには気が付かないだろう。

夢幻のソラ 第二章第二幕

「—— 一体君は何者なんだ？」

暗闇の中、目の前の少女に問いかける。

「・・・・・・」

しかし目の前の少女は静かに口元に妖しい笑みを浮かべ笑っただけだった。

目の前の少女、銀色の髪を持って黄金の眼した少女イザナミは、一言も言葉を発しない。

「君は僕の何を知っているんだ？」

「貴方も覚えているはずだよ。私のこと」

表情を変えずに淡々と話すその表情は暗い。そのせいで彼女がどのようなことを考えているのかさえ分からない。逆に彼女が何も考えていないかのような錯覚に陥ってしまいそんな感じもする。

「いや、僕は君のことなんて覚えてない。そもそも知っても無かったはずだ」

「・・・そう」

そう静かに呟く彼女はどこか悲しげな、儚げな雰囲気を纏っていたような気がした。

「覚えてないのね、 ■■■」

何、だって・・・、何故か聞き取れなかった・・・。

「ちよっと、今なんて・・・」

彼女に問いかける。しかし彼女はこの問いに答えぬまま消えるように去っていった。

何故か去り際に一瞬、彼女の髪が黒く見えた。そんな気がしたのは気のせいだったのか。

「——ッ!？」

飛び起きた。まだ心臓が激しく音を立てているのが感じ取れる。

夢から覚めたようだが残念ながらまだ朝ではないようだ。窓を通して見る空はまるでツクリモノのような漆黒の空だった。

・・・少し気を沈めるためにも散歩をしてこよう。

...

「随分と久しぶりだな」

この道を歩くのは二、三年ぶりか。昼間でも随分と鬱蒼としていて怪しい道だから、夜ともなると妖怪や魔物が出てきてもおかしくな

いような道になってしまっている。

・・・まさか本当に魔物と言うか異端や人憑の類が出てこないだろうな。ちよつと不安になってきた。一応レンを召喚できる準備ぐらいはしておこう。

その時

——ガサ・・・

「ッ!？」

右の林から小さな音がした。普通の動物かもしれないが一つ違和があった。一瞬黄金の光が見えたのだ。

どうやら向こう、恐らく人憑は、まだこちらに気が付いていないらしい。すぐさま呪文を詠唱し、レンを召喚する。

「どうしました、マスター」

「いや、あの林の中に人憑がいるかも知れないから」

「成程。人憑ですか」

「まあ、ただの動物かもしれないけど」

「ふむ、でも用心に越したことはありませんから」

レンは弓を僕の指差した林へと向ける。・・・そんな真剣な顔しなくともいいと思うんだけどな、動物かもしれないんだし。

・・・。

・・・。

「・・・どうやら行動を起こす気は無いようですね。私たちも引きましようか。無駄な戦闘はこちらの体力を削るだけです」

「そうだな」

「一応このままの状態ですから、有事の際は対処できますので」
「うん、頼むよ」

戦力になってくれるレンがいるだけでも心強い。僕は攻撃魔術を使いたくないから、あんなことはもうゴメンだ。

「マスター、そんな顔してどうしました？」

「あ、いや、何でもないよ」

「そうですか。あまり顔色が優れないようでしたので」

「本当になんでもないから大丈夫だよ」

「そうでか・・・と、誰か来ます」

「ん・・・本当だ」

前方から少女が一人歩いてきていた。きつとこのあたりに住んでいる人だろう、見たことが無いから最近引越してきた人か？

「あ、こんばんは」

「こんばんは」

「こんばんは」

その少女は黒い髪と黒い瞳をした何の変哲も無い普通の少女に見えた。それにしてもこんな時間に徘徊しているのはおかしい。まあそれは僕たちもなんだけど。

「こんな時間に外を歩いてちゃ駄目だよ。まあ僕も人の事を言えないんだけどね」

「・・・あ、ごめんなさい。それとどちら様ですか？」

「ああ、僕は佐上瑞樹。で、彼女がレンだ」

「佐上・・・あ、そこのお屋敷の人ですか。それじゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみなさい」

そう言っ歩いていている少女の背中を眺めながら、なにやら引つかかることがあった。

「レン、あれは人憑だった？」

「いえ、違うと思いますが」

「そう、よかった」

なら、この違和感の正体は何なんだろうか。

・・・あ、名前聞いてなかった。

...

「あ・・・瑞樹・・・」

「怜美？」

家に帰ると何故か目を赤く腫らした怜美が待っていた。もしかして泣いていたのかな？

「また瑞樹が帰ってこないのかと思った・・・」

「・・・そう、ゴメンな」

“また” 帰ってこなくなる、ね。

「うう、・・・みずき・・・」

「つと・・・ゴメンな怜美」

「え・・・瑞樹？」

泣いている怜美を優しく抱きしめる。怜美が困惑したような声を上げるが今回は無視だ。

「大丈夫。もう、いなくなったりはしないよ」

「う、うん・・・」

彼女が弱々しく返事をする。

「大丈夫、大丈夫だからね」

僕はただ、彼女を静かに抱きしめていた。

：

「寝ちゃったか」

しばらくそのままでしたら、怜美が静かに寝息を立てていた。目は真っ赤になっているけど幸せそうな表情だからよしとしよう。

「よいしょ、つと」

彼女を抱き上げ彼女の部屋へと運ぶ。レンは家に帰ってからすぐに寝るとかなんとか言い出して寝てしまっていて、召喚し続けている意味は一体何なんだろうと思うが、こんなお姫様抱っこしてる姿を見られるよりはましだろう。

「それじゃ、おやすみ」

彼女は聞いていないだろうけど静かに挨拶して部屋に戻った。

第二章第二幕（後書き）

何だこいつら、ラブラブしやがって。

第二章第三幕

黒い髪が空に靡く。その光景を見るのは実に久しぶりだ。

最近は銀色の髪ばかりをしていたお陰かこの姿をするのは十年以上ぶりかな。

しかしこの姿をするといろいろ不便があるので、気配を出来るだけ消して力を解放。見慣れた銀の長髪が空を舞い、身体に力が流れてくる。

そしてその力を足に集中させ、跳躍。眼下の森を飛び越えて、先程の情報どおりに佐上邸へと急ぐ。

どくと、心臓が大きく音を立てた。

夢幻のソラ 第二章第三幕

「結局行かなくてよかったんですか、分局長？」

瑞樹君が実家へと帰った日の深夜。私は事務所で佐上分局長と向かい合っていた。

「よかったんだよ。彼は君の話だと案外けろつとしていたようだから、直接彼女にあつて話すのもいいと思うんだ」

成程。直接あつて話す、か。

「あ、待つてくださいよ。それじゃあ、彼女は今、絹乃杜にいますか？」

「うん。いるけど何か問題でもあるのかい？」

「ありますよ、これは仮説ですが彼女は恐らく神憑です。そんなものと一緒にするのは危険だと思いますが」

私の調査だと彼女——佐上瑞枝は恐らく神憑。相手の戦力が計り知れない状態で人と故意に近づけるのは危険だろう。

そう思ったのだが……

「ああ、それなら心配要らないよ」

目の前の彼はそう言い切った。

「——そもそも彼女の目的が“殺害”ならばもうとつくに仕事を終わらせているはずだから。

それに彼女の目的は“接触”みたいだからね。これは僕の推測だけど」

私の何故、と言う疑問はすぐに解消された。

「でも瑞樹君には彼女が神憑であることは伝えたほうがいいと思うんですけど」

「確かに。それは一理あるね」

「それじゃ、どうします？」

「……手紙でも書くよ、分局長名義でね」
分局長名義ということは、まだ自分の職を瑞樹君には明かすつもりは無いらしい。

「ならパソコン貸しますから、書いてください。それとも便箋のほうがいいですか？」

「便箋は遠慮しておくよ。君のところの便箋は高そうなものばかりだからね」

アンティークの小物の中に紛れている便箋を見ながら言う彼の目が本気だったのを記憶しておこう。

「たしかあれは100枚組みで一万円以上しましたよ」

「……パソコンを借りるよ」

値段を聞いた途端彼の顔が一瞬安堵したものになって面白かったことも記憶しておこうか。

「瑞樹様、おはようございます」

「あ、苑田さんおはよう」

朝、起きて居間へと行くと苑田さんが割烹着を着て朝食を作っていた。

「そうだ苑田さん。怜美って起きてきた？」

「まだ起きられていないと思いますよ」

「うん、じゃあ起こしてくるよ」

「ええ、お願いします、それと瑞樹様宛てに手紙が届いていますので」

「じゃあ戻ってきたら確認するよ」

「はい、分かりました」

僕に向かって一礼する苑田さんは凄いと思う。家政婦の鑑ではないだろうか。そんなことを考えながら、怜見のいる離れへと向かった。

：

「あ、マスター」

「ああ、レンおはよう」

離れへと向かう廊下の近くの中庭にレンがいた。

「レン、そこに何かいるのか？」

彼女が覗き込んでいたのは中庭の池。何かいたようないなかったような気がするが詳しくは覚えていない。

「ええ、ここに鯉が数匹」

「そうなんだ」

鯉、なんとなく記憶にあるような、無いような。

彼女はのんびり、ほんわかした表情で鯉を眺めているし、怜美を起

こしに行くか。

…

「怜美、起きて…」

「み、瑞樹っ!？」

ドアを閉めた。怜美が部屋の中で着替えをしていた。そんな中でドアを開いたものだから彼女の下着姿を見てしまった。ドアの向こうでなにやら恥ずかしそうに呟いてるし。

「…で、み、瑞樹はどうしたの？」

「いや、怜美がまだ起きてなさそうだったから、起こしに来てただけど…」

気まずい沈黙。ノックぐらいはすべきだったと、いまさら反省しておく。

「そ、そんなことなら大丈夫だよ。先に行つて…」

「あ、うん。分かったよ」

気まずい沈黙は続く。気のせいかこの空間から抜け出たくて小走りでこの場を立ち去った。

…

「苑田さん、手紙ってどこにあるの？」

先程苑田さんが言っていた僕宛の手紙、一体誰からのものだろうか。

「はい、これでございます」

「ありがとうございます」

苑田さんが取り出したのは一つの封筒。消印は青山市の郵便局で恐

らく差出人は黄空さんだろう。第一、僕がここにいることを知っているのはそれくらいしかないわけだし。

そう思い、封を切る。そこに書いてあった差出人の名前は予想を大きく反するものだった。

——全魔術協会日本支部第三分局長

差出人の名前はそう書いてあった。

全魔術協会日本支部第三分局長と言えば僕たちが所属している組織の青山、藍川地区のトップだ。そんな人が僕に何か用だろうか。内容を知るため、落ちたたまれた紙を開いた。

佐上邸。私が絹乃杜に来て見た建物の中でも1、2を争う豪邸なんじゃないかな。

「それにしても広いなあ……」

ざっと見ただけでも、母屋、離れが二つ、中庭などの建物があつてあのころと全く変わってない。しかし一つだけ変化があつた

「っ！？」

中庭を散歩している一人の少女。金髪碧眼の昨日の夜、彼と一緒に歩いていた少女だ。

何処かで見ただことのある少女なんだけど……。思い出せない。

……この姿を見つけられたら困るし、早くここから退こうかな。もう一度夜に来ることにしよう。

第二章幕間

『人憑の究極体、神憑についての研究記録』

これは自分が十数年神憑に調べ、それを纏めたものである。

神憑、それは人憑の中でも最も危険な存在ではあるが、神憑としての能力を顕す個体は極めて少ないようだ。神憑は明朝でも少数しか確認されていないようだ。

刀を作る傍ら自分はこの神憑について調べてきたが、個体が少ない故に情報も少なく、統計が取れていないのも実情であるがここにその記録を残す。

夢幻のソラ 第二章幕間

神憑。それは人に神が取り憑いたもので、人憑の仲間である。神憑としてその能力を人に発揮するものは極めて少ないが、ただ人に取り憑いているもの、人を寄り代として神が顕現しているものなど全く無害な神憑も存在する。

しかし、その神憑の中でも有害なものも存在しているようだ。自分が調べた中で最も身近に感じる事が出来るのが、貧乏神だ。これも神が人に取り憑き、人を貧乏にしているある種の神憑である。

しかし、最も神憑の中で危険性の高いものは悪しき神々の取り憑いたものだ。やつらは神の力を発揮し、通常の人憑としての能力を遙かに上回る能力を使用する。その能力は通常の異端、人憑等は一撃で倒すほど、一般人ならばその威圧だけで倒れてしまうほどである。

自分が出会った中でも異端や人憑きなどとは明らかに異なる雰囲気
を纏っているものが殆どだった。見た目が大きく変化しているもの
も多く神憑を知っている者であれば一目で見分けがつくだろう。
だがその強力な力を持つ神憑は個体が少ないゆえにその被害も少な
いだろう。

以上が自分が十数年に亘って調べ上げた神憑についての記録である。

永正11年 南冲尋定

——手紙には、ただ、そう書かれていた。

第二章幕間（後書き）

南沖尋定って読めますか？

第二章第四幕

「瑞樹、手紙ってなんだったの？」

「——っ？」

いきなり後ろから声を掛けられ、驚いて後ろを向く。

「あ、驚かせちゃった？」

「いきなり声掛けないでよ」

夢幻のソラ 第二章第四幕

背後に立っていた怜美に思わず突っ込みを入れたせいで空気が微妙に和んでしまったが今はそんな暇は無い。

それより手紙だ。この全魔術協会日本支部第三分局長から一介の魔術師である僕に送られてきたこの手紙について考えるのが先決だ。

「怜美、この手紙ってどういう意味だと思う？」

書かれていたのは過去の神憑についての研究文のみだった。

その内容が指すこと、判るような気もするが確信が持てないでいるんだな。

「…あのイザナミっていう子のことかなあ？」

「やつぱりそう思う？」

やはりイザナミのことを指しているらしい。

イザナミ、今まで出会った人憑の中でも最強と呼べる理由、それが神憑だったわけか。

「じゃあ、レンにも伝えておいとこうかな」

そう言って席を立とうとした瞬間、

「おーい、帰ったぞー」

玄関のほうから声がした、間違いなく父さんの声だ。

「瑞樹ちゃんいる？」

続いてソプラノボイス。コチラは母さんの声。

ということは昨日僕らと呼んどいて、本人たちが一晩空けて帰ってきたわけだ。何を考えているんだろうか。

…

うちの親は、実の子の僕から見ても謎の多い人たちだった。

そのうちの一つがそう、職業だった。

うちの家計はしっかりと成り立っているで少なくともどちらかが働いているのは事実。しかし、どちらが働いているのか、何をしているのかなどは全て分からない。

「いや、実は仕事が長引いちやって」

そんな父さんが仕事の話をしたのは初めてだった。

「まあいいけど、そういえば何の仕事してるの？」

極一般的に興味からわいた疑問。

「うん、まあそろそろ話してもいいかな、瑞葉？」
みずは

「いいでしょー」

軽い性格の母さんとなにやら相談をしている模様。
そして、

「僕と瑞葉の仕事は——魔術師だよ」

「…魔術師？」

「んー、そうだけとお母さん的には怜美ちゃんとの関係がどうなったかの方が気になるなー」

何故そっちへ話を持っていくんだ。

「母さん、それは向こうの部屋で怜美にでも聞いててよ」

尤も、聞いてほしい話ではないんだけどこの際はしょうがない。

「わかったー、じゃあ怜美ちゃん連れてくねー」

「ええ？瑞樹ー！？」

連行されている怜美を見送りながら父さんに聞く。

「で、魔術師ってどういうこと？」

「魔術師、瑞樹もそうだよ」

そういう父さんには小さいころから魔術師であることはずっと隠し通してきたんだけど。

小さいころはパンドラの箱を開けてしまった気がして、今は信じてもらえないと思って。

「…何でそんなこと知ってるのさ？」

「だって僕は——」

視界に入った二人。

“彼女”の力を借りるまでも無く私自身の本能が関わってはいけな
いと警告を発している。

何か危険な異常者が強力な魔術師か。とにかく危険な二人組だ。

私が本気を出せば倒すことは可能かもしれない。しかし私の力の特性上あまり派手な戦闘を行うと危険な目に遭うのはわかっていることだ。そんなリスクを負うぐらいならこのまま様子を見ているのもいいかもしれない。

そしてもう一つの理由。

それは——二人が私の両親だからだ。

「ねえねえ怜美ちゃん」

前に嬉嬉とした表情でいる瑞樹のお母さん。一体何をするの？

「うちの瑞樹ちゃんとどんな関係？もう付き合ってるの？」

コイバナ？

でも付き合ってはいないから首を横に振っておこつ。

「じゃあどんな関係なの？友達以上恋人未満って感じなの？」

「うん、そんな感じ」

そんな感じじゃないかと思う。でも瑞樹の気持ちはわからない。

「ふーん、じゃあもう結婚直前っていう感じかな」

「…けっこ…ん」

顔が赤くなってる気がするよ。

「だってそうでしょ。瑞樹ちゃんもまんざらじゃない感じだよ」

「ええっ、そんなあ」

「いっそプロポーズしちやいなさいよー」

「プロポーズう！？」

さっきから押され気味な気がするよ

「なるほど、なるほどー」

何か悟ったような瑞樹さんの顔。何を考えているのか考えたくない…
婚姻届がどうだと言っているのも気のせいだね、ははは…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3430j/>

夢幻のソラ

2010年10月10日01時53分発行